句集

鈴蘭

中山輝鈴

句集

金鈴

中山輝鈴

さき書房

句集　金鈴（きんれい）　定価 2,700円

昭和58年12月25日発行

著者　中山輝鈴

発行者　秋山朔太郎

発行所　有限会社　さき書房

〒162 東京都新宿区矢来町23
TEL 03(269) 7870
振替・東京6－78880

印刷／巴工芸　製本／祐文社・岡本製本

© 1983 by Kirei Nakayama, Printed in Japan.

ISBN 4-915518 C0092

序にかへて

山口青邨

時つくる宝前梅雨の鶏一羽

社前一羽の鶏がゐて突然首を上げて大きくコケコッコーと鳴いた、朝はもちろんよく時をつくるが、真昼間でもこんなことをする鶏がゐるものだ。一羽の雄鶏がいつの間にか社前まで来てゐて時をつくつた、森閑とした神社、参詣の人もゐない。折柄梅雨、しとしと雨が降つてゐる、降つてゐなくても梅雨曇、そんな時、所もあらうに宝前、意外でありまた鬱々の中の鶏鳴は心持を朗かに破るものでもあつた。

一人訪ふ羽子板市に喪章秘め

近親の喪に服する人、他の句によると姉上のやうである。年の暮、ふと羽子板市が見たいと思つた、俳人だからでもあるがかういふものでも見れば悲しみもまぎれるといふものである。喪中誰彼誘ふわけにも行かない、一人で行つた。浅草であらう。喪章秘め——は葬式の時使つたものをまざまざ見えるやうに具体化して言つた、ポケットに入つてゐるといふわけではあるまい。とにかく絢爛たる羽子板と喪章を眼に浮べさせる効果をもつてゐる。

夜桜へ喪の灯をこぼす峡の家

谷ぞひの家、このあたり桜が多く花見の人も多い。夜桜と言はれると一応かういふ情景を思ひ描くが「夜の桜」といふ意味ももちろんある、朝桜、夕桜といふやうに取扱へばさうなる、言葉のニュアンス。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そこでここではどちらに解すべきか。夜の桜へ喪中の家から灯がこぼれて花が明るく見えてゐる――とするか、夜桜を見に来てゐる人のぞろぞろ通るその桜の花に悲しい灯がこぼれてゐる――とするか。悲しみと歓楽の現実が出てゐて面白いと見る人もあるかも知れない。

「いや夜の庭の桜へ」とする方が穏やかでしんみりするかも知れない。つまり「夜桜」といふ言葉がかもすまどひである。

〈短　評〉

迷ひ犬誰にも尾振り花の雨

花見のにぎわい、雨が降つて来ていよいよ雑沓、迷ひ犬が誰彼に尾をふる。かわいそうだ。面白い。

（昭和三十八年）

貧しき句ぺんぺん草に触れて詠む

「ぺんぺん草を生やしてやる」という台詞もある、不毛の地の草、なずなの花、実。謙譲の情。

（昭和三十九年）

犬の骸犬が嗅ぎよる震災忌

あの時はまさに阿鼻叫喚地獄だつた、その日、犬が犬の死骸に嗅ぎよる、何かを想像させる。

（昭和三十九年）

梅漬くる厨の妻の背より老ゆ

妻が台所で梅をつけている、その後ろ姿、背のまるみ、肩の落ち方などで老いてゆく姿を見た。

（昭和四十年）

煙草一つ買ふ下駄鳴らし蝶の昼

若い人の明るく自由な気もちが感じられ、「蝶の昼」で情景が語られている。佳作。

（昭和四十二年）

新居得し安らぎ妻の梅に病む

老境にはいってゆく夫婦、家を新築、これで老後安定を得た、その安心に妻は病気、庭には梅が盛り。

（昭和四十二年）

母の忌のいつも貧しく枯葉舞ふ

母の忌日、落葉の頃で寒く、淋しい時だ、ろくな法事もしてやれない。

（昭和四十三年）

よべ借りし傘木苺の花に干す

昨夜借りてきたカサ、木苺の花の咲いている庭に干した、木苺の花は白く軽やかな花、よい天気、軽快。

（昭和四十三年）

朝月の匂はしひらく黄のカンナ

朝早く残る月、光はなく黄色は淡く、庭の黄色のカンナの花に映えてしつとりと美しい。

（昭和四十三年）

雲焼くる粗巣に鷺の三番仔

鷺の巣は粗雑である、雛が落ちることがある。いま三番仔、雲が赤く焼けている。雛も透けて見えるようだ。

（昭和四十四年）

末枯へ轍は死者を運びし径

柩車の轍を見ていると、人生無常を再び痛感させられる。「末枯」は「滅び」を暗示する。佳作。

（昭和四十五年）

郷の母泊めて秋蚊張妻と吊る

母への心のこめ方が、さびしい新ガヤのいろにうつろつているような実感がこの句にはある。佳作。

（昭和五十年）

父眠る夜も山百合の匂ふ墓所

山百合の花咲くころは七月の盆のころ。夕べの墓を去るこころか。あるいは望郷のそれか。

（昭和五十三年）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金鈴

目次

目次

題簽　山口青邨

序句……山口青邨

序にかへて……山口青邨

秩父路（昭和十五年より昭和二十五年まで）……13

雪解川（昭和二十六年より昭和三十七年まで）……41

木苺の花（昭和三十八年より昭和四十五年まで）……71

螢の碑（昭和四十六年より昭和五十年まで）……135
古都晩秋（昭和五十一年より昭和五十五年まで）……187
初蝶（昭和五十六年より昭和五十七年まで）……261
跋……田子水鴨……297
あとがき……305

秩

父

路

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com